



稻作小言



船津傳次平 訂
奈良軍平 著

稻俣小言

東京 秀明堂 發兌

稻作小言序

此書を竊初反故紙の中ふありて何人の作なるや更まわらざ唯何こゝろなく讀み見る小俗ふ云ふチヨボクレチヨンガレの句調よならひ稻作改良の事どもを竊木トトろをうく綴りたるものありこそ彼のむづろき理屈をならべて物知り顔に書立たる當世風の著述よりもまさりて奥ゆろくぞおほえけるさまは此儘むげよすつるも本意なく思ひ通りのまゝに寫つ一二たとせあまりひめおきしが或人のすゝ

めより先つ頃梓よちりなめ世ふ公よまをとい
つどもいゆりたりざるるところ何れ故よこ
び船津大人ウツシの訂正をこひてみよびあるよを
何をん

明治二十三年八月

編者識

稻作小言

船津傳次平訂
奈良軍平著

ヤレく皆みな様、
一ばらく御耳おんみみを、
一ますよ、
おたしと申まをすは、
一その又またむかしの、
神世かみよの
時代ときに、
豊蘆原とよあしはらより、
あらはれ出でま
して、
夫そまより日本よほんに、
廣ひろまりまいた

る、御米（お米）であります、此（こ）たびか—こ
き、皇國（みくに）の爲（ため）にと、種（くね）にりたねまき、
こや—にさ—なへ、草取（くさとり）水掛（みづかけ）、害（がい）
蟲豫防（ちゅうよぼう）に、收穫調製（しゆくわくてうせい）、貯藏（ちよざう）につきか
た、飯炊法（めいたくはふ）まで、實地（じつち）を主（しゆ）として、
あらま—述（のたま）ます、飯（めい）にハ勿論（もちろん）、酒（さけ）で
もす—でも、菓子（かし）でも味噌（みそ）でも、御（お）

米（こめ）で造（つく）れば、味（あじ）ひよろ—く、紙漉（かみ）く
糊（のり）にも、布張（ぬのし）るのりにも、調法（てうはふ）致（いた）—
て無類（むるい）のものなり、貴（たか）き御方（おき）も、賤（いや）
—き御方（おき）も、鳥獸類（ちゆうどうるい）でも、昆蟲類（こんちゆうるい）で
も、日々（いちじく）食（た）—て、繁殖（はんしよく）するなり、精（しゆ）
げる時分（ときぶん）に、いでたる粉糠（こなぬ）ハ、牛馬（ぎうば）
の食料（しよくれう）、風呂場（ふろば）に有用（ゆうよう）、肥料（ひきりょう）に要用（たうよう）、

澤庵漬たくあんづけにハ、最ももつと必用ひつと、糠味かうみ噌漬そづけにも、是これ又また同様どうじやう、其その又また莖葉きんぎょ、飢饉ききんの食料しきりょう、製紙せいしの材料ざいりょう、繩なえ簾しの筵むしろに、俵たふらにい込こに、草鞋ぞうぢに脚半きゃはんに、乞食こどきの寢所ねどころ、農家のうぢやのふきくさ、垣壁かきをうんどに、添そふるハ勿論もちろん、貯蓄ちよちよの種物たねもの、包つんでたくなら、温氣おんきも透とほらず、濕氣しつきも侵おさ

ず、其外そのほか牛馬ぎうばの、飼料かうりょうに宜よろしく、焚たききてハ其灰そのはい、種々しゆじゆに必用ひつと、腐敗ふはいしますりや、肥料ひきりょうに適當てきとう、其外そのほか効用かうりやう、枚まい舉きよに盡つくせず、貴重きちゆうのく、無類むるいのものなり、然しかるに此このごろ、御米おんこめを廢はいして、肉食世界うしじかに、改良かうりやうしなさる、御おん説せつもきいたが、肉食世界うしじかを拒こむト

やなけれど、獸類何ほど、繁殖をす
とも、直段が高くちや、下等の人民、
喰ふこと叶はず、肉食するに、
現今一日、四五十錢程、要するなる
べし、米なら三錢、四錢で澤山、穀
類作れば、壹反貳反の、僅かな田地
の、收穫ものでも、一戸の家内の、

四人や五人、年中食して、餘りが
あります、牛馬を壹頭、そだて、見
なさい、壹町貳町の、草でいたるま
い、或人申すに、數年原野に、放牧
するに、一頭飼育に、六七町餘の、
地面を要すと、ヤレ、皆様よ
くき、なされよ、六七町餘に、一頭

ぐらぬを、飼ふよなことで、三千
八百、餘萬の人民、匂ひを嗅ぐに、
足りるであらふが、喰ふにいたる
まい、足らざるるときに、肉類輸入
し、つまり必ず、御國の損まう、
近年御米が、豊作つゞきで、やすね
であれども、やすねであるとして、棄

ていけな、充分はげんで、智力
をつくして、赤米青ごめ、腹白糍、
少しもなくして、光澤味ひ、最も
よろしき、日本固有の、上等種類を、
多分に作りて、俵とすまで、手
ぬけのなきよに、御注意をされて、
ドシ、輸出、外國一般、其よき

あぢはひ、十分一ら一め、肉食世界
も、米食世界に、變ずるやうにと、
盡力するこそ、農家の職分、皇國の
忠節、皆様はげんで、勉強なされ、
皆様はげんで、勉強なされば、御
金いどつさり、日本に充満、
くく

撰種

良米澤山、收穫一なさる、稻種にら
むい、風ぬけ宜しく、かわける地質
の、上等地面に、上出来致して、何
れへ伏すとも、藁ぐきをれざる、一
穂の粒數、多數の勿論、其うち糶の、
少一もなき穂を、撰んでとるべし、

あら莖折るゝの、性質弱くて、御
米の横部に、白點つきたる、よから
ぬ御米が、交つて出来ませ、交つて
出来れば、貯ひなしても、腐蝕をう
くべし、糶のまじれる、稻穂を種と
し、ひなを省きて、播つけなされ
ば、生立やすれども、さしなへ後に

の、不同に繁りて、いもぢに葉がれ
に、其外少しの、不時候うけても、
糶に青米、どつさり出来ませ、糶が
元部に、ありませ、稻穂の、穂先とい
つども、糶の兄弟、種にいなさるな、
晩稻の種類を、早める時に、穂
の出の早きに、しるしをつけ置き、

撰んでとるべし、西洋種類も、遠國種類も、近國種より、變性多くて、困つたものなり、然りとていへども、變性中に、まさるもまゝあり、手作の稻種、よからぬ時に、他所の良種を、少く試作し、利益を認め、多作をなすべし、寒地の稻種、

暖地にうつせば、おほむね早熟、暖地の稻種、寒地に移せば、大むね晩熟、かくあるもの故、交換法とて、漫りにかへるに、損毛たるべし、早熟稲あとに、おかくてがよいとか、おかくての跡に、早熟稲よいとか、毛稻のあとに、坊主がよいとか、

いろくさまぐ、理屈をきけども、
數十年來、同所に同種を、作りて無
異なる、種類もありませ、赤米豫防
ハ、穂のまゝ四五日、水中に浸して、
變色する穂を、すつぱり省きて、
残りをかわかし、こをりて需めば、
赤米まぐらぬ、種子を得るなり、種

子となすにハ、若かり宜しく、たそ
刈あしと、云ふ説あれども、充分
熟して、藁色あをみが、うせませ
なら、最もよろしく、拔穂をなすに
ハ、藁いろ青みが、少しもあるなら、
根部よりぬくづく、穂ばかり引ぬ
き、其まゝ日向に、乾燥なると、

米こめに小こひひを、發たつすることあり、
御ご注ちう意いあるべし、さて又また刈かりつたら、
降ふり雨うにあはせず、乾かん燥さうなされて、穂ほ
を扱さきたとして、連つら枷かつかふて、粃ち
毛けをとるべし、からさをつかへば、
響ひびがわたつて、種たねにいあるいと、云い
ふ説せつあれども、乾かん燥さう宜よろしき、稻いね穂ぼに
十

於おてい、少すこしも心しん配がいなさるに及およば
ず、乾かん燥さうしたなら、冰ひよう下げの水みづにて、
粃ちをうかめて、掬すくつて取とのけ、或あるひは
食し鹽えん、一ひと貫まん二百目、乃な至いた一ひと貫、五
百目ばかりに、一斗との水みづいれ、鹽しほ水みづ
つくりて、深ふかさのありより、徑わたりの
短みだき、小こ桶けに容いれ置おき、小こさるに種たね
十

粃もち 半分はんぶんほど入れ、尻しつよりざぶり
と、小桶こけにたしはめ、中なかなる種たねをバ
よくかきまはして、火鉢ひばちに用もちかる、
針はりがぬづくりの、篩ふるひをもちかて、
浮うむをすくつバ、青米腹白あをいぬ、粃もちに稗ひね
種たねのこらずとれます、それより直すく
様さま、水みづにて洗あらふて、乾燥かんさうをされて、

貯たくいへたくのが、普通ふつうの法方てふほう、尚たふ又一また
層さう、上等じょうとうにらみい、一穗ひとほの中うちにて、
二粒にりゅうか三粒さんりゅう、粃皮もちかわはぎ去さり、米質光まいしつこう
澤たく、こまかに見分みわけて、望のぞみに叶うなつた、
穗ほのみをこなして、四五合四五あひもとめ
て、原種げんしゅに致いたして、苗田かべを區別くべつし、
一年ねん作つくれば、七斗しちとや八斗はつとの、種粃たねもちで

きまます、其^{その} 粃^{かき} たぬにも、鹽^{しお} 水^{みづ} もちか
て、粃^{かき} をとるべし 種^{たね} 粃^{かき} 注^{ちゅう} 意^い け、乾^{かん}
燥^{さう} なされて、俵^{たわら} に入^い れたら、しつか
りく、つて、温^{おん} 氣^き や濕^{しつ} 氣^き の、成^な るべ
く少^す くなき、處^{ところ} におくべし、然^{しか} るに
近^{ちか} ごろ、テールブル農^{のう} 事^じ や、見^{けん} 聞^{もん} 農^{のう} 事^じ
が、盛^{さか} んにおこつて、實^{じつ} 地^ち にあいざ

る、理^り 論^{ろん} を主^{しゅ} 張^{ちやう} し、理^り のある筈^{はず} だと、
云^い ふ理^り を持^も 持^ち たし、實^{じつ} 地^ち を倒^{たは} して、
虚^{きょ} 説^{せつ} を維^い 持^ち して、新^{しん} 聞^{ぶん} 雜^{ざつ} 誌^し に、廣^{くわ}
告^{こく} するやら、農^{のう} 書^{しよ} に出^だ すやら、演^{えん} 説^{せつ}
するやら、右^{みぎ} 等^ら の概^あ 畧^{りやく}、撮^{つま} んでまを
せば、中^{ちゆう} 等^{とう} の地^ち 面^{めん} の、中^{ちゆう} 等^{とう} のできに
て、種^{たね} 粃^{かき} とれとか、下^げ できのところ

で、種たね籾もみどれとか、雌め穂ほのみ撰せんめの、
穂ほ先さきをはらめの、中な頃ご撰せんめの、過あ
熟しやくをのぞけの、種たね籾もみこなすの、櫛くしにて
おとせの、瓢ひょうでうてとか、草くさ鞋ぢです
れとか、日ひ向むかひのほしてい、籾もみ皮かわさけ
るの、生た立たちわるいの、鹽しほ水みづ撰せんみの、
種しゆ子しをがいすの、倉そう庫こにかこふの、其その

理りにそ背そくの、舍や外ぐわいにくふの、土ど中ちゆうに
かこふの、水すい中ちゆうにくふの、寒かん水すい浸ひくの、
の、樹じゆ木もくにさげるの、四し季きのき候こうを、
種しゆ子しにくらすの、大だい豆づのた俵わらに、種たね籾もみ
いるれば、發しつ芽がいないの、生た立たちくの
ないの、ひたたくのながきの、穂ほので出でが
早はやいの、なんどい申まをして、貴き人じんをあ

ざむき、農家を迷はず、徒勞の世話
やく、御方が多くて、當惑しますよ
水中に圍ふも、土中にかこふも、す
つぱりやめにし、植たら大概、七
八日より、二十日以内、氣候に
注意し、蟹爪つかつて、四五日ほど
経て、よくかきまはして、土塊を碎

きて、其後草とり、水かけ水ほし、
ほどよくするなら、收穫多きハ、疑
ひこれなく、儲又もどつて、糞皮さ
けない、説明します、ほしたる為
に、しなびるものにて、裂けるの
心配、なさるに及ばず、みのりの期
節に、早魃がつぎきて、急雨にあひ

なバ、さけるもあるべし、さて又稲
苗、むかしのく、其又むかしの、
川野に生ひしも、むかしのいつやら、
農家の手に入り、數千年来、田畑
に作られ、刈られてほされて、こか
れてうたれて、而してほされて、
にいれられ、しつかりく、られ、
扱

ひ得ました、習慣よりして、其性が
はりて、櫛にて落すも、草鞋でする
のも、瓢でうつのも、いれたる俵を、
ゆるくくするも、效能ござらず、
鹽水用かて、糍を抜くなら、穂先
の三分を、とるにも及ばず、七八回
程、ふくにも及ばず、種籾貯藏の、

在来通りの、濕氣や温氣に、あいせ
ぬ工夫が、我等に適當、今更むか
の、野生の積りで、水中に圍ふの、
土中にかこふの、樹木にさげるの、
寒氣をいらすの、氣候をいらすの、
なんど、唱て、心配なさるの、反て
迷惑、蠶を野に飼ひ、牛馬を雪中

野山に放つも、同然たるべし、舍外
に圍ふの、迷惑く、

播種

苗田に適する、地面と申すの、風ぬ
けよくして、かわきがよくして、水
かけ自在の、水ぼし自在の、ひはざ
る處に、定めてたくべし、定めてた

いて、地質が瘦たり、蟲氣がふえたり、
たれ故かつると、云ふ説あれども、
漫りにかつれば、苗とりよからず、
其なつ植れば、成長あしくて、損なる地もあり、
御注意肝要、風ぬけ宜しき、
所の苗田に、播つけをさるゝ、
四五日前から、十四五日ほ

ど、三尺ばかりの、高さの風除を
されば完全、さて又整地と、種播き
時日、地質と氣候と、農事の都合
と、肥料に關係、最もおほくて、
僅かな詞に、盡せぬこと故、
後日にゆづりて、
是よりたぬまゝ、
手續を述べます、
先其初めに、
籽種びたし、

桶けでも瓶びんでも、池いけでも川がわでも、腐くさらぬ水みづなら、障さまたハござらず、一週しゅう間かん程ほど、浸ひして引揚ひきあげ、暫しばくかわか、くど見みるなら、早速さつまくべし、水みづ漬つけ二十日に、乾かわし七日と、云いふ説せつあれども、泥どろむに及およばず、種たねまきをすはハ、整頓せいとん地面ぢめんを、少すこしもほさずは

概おほぬ二寸ふたすんの、深ふかみの水みづとし、一坪いっぺい一いちがふ、乃な至いたハ四合しごうを、播まきつけをされて、而しかして濁水だくすい、小こ雨さめの降ふるよに、上うへより散布さんぷし、少すこしく濁どろせば、雀すずめも鳥とりも、這入こいひらぬものなり、其その又またににごりが、澄すみたるときにハ、粗種こそ衣たね衣いろもと、なりますこと故ゆゑ、漆うるしで地面ぢめんに、

着けたる様小て、風雨に動かず、而
して翌日、天氣をみとめて、充分ほ
すべし、雨ふる日ならべ、止むとき
またれよ、水ぼしなされば、空氣と
溫氣の、たすけを得る故、忽ち芽が
でる、是より四五日、一二分ばかり
に、薄水ろぎて、毎日一度り、少

しくかわかし、溫氣を與へよ、一寸
有餘小、のひると見るなら、苗丈半
程、水かけなされて、尻口とめたき、
勉めてひぬよ小、なすころ肝要、
尻口まうけて、新陳代謝の、水掛し
なさる、理論はあれ共これ等、眞小實地を
る、農家の説なり、叔ましまへより、

苗田なへだの近所きんじよ小、三寸ばかりの、深ふか
みの水溜みづため、四五十坪つぼほど、設まけてた
くべし、其水みづぬるむを、苗田なへだ小ろ、
げば、成長せいちやうよろしく、苗田なへだをふみな
す、蛙うぐすも其場そのばに、たはむれ遊あそびて、
苗田なへだ小、這えひらず、かはづを驅除くどする、
地方ちほうもあれども、蛙うぐすハ素もとより、有あ
り

益えき蟲ちゆう小て、稻蟲いなむしとるゆゑ、防ふせぐに及およ
ばず、雷雨らいうの空合そらあひ、見み江えますとき、に
い、其水そのみづためより、早速さつそく引ひかれ、三
寸有餘ゆゑの、深ふかさの水みづとく、急雨きんう小り
たれぬ、用意用意小必用ひつよう、其外そのほか近所きんじよよ、七八坪つぼほど、
早播はやばきなされて、螟蟲めいしゆう豫防よぼうよ、捨苗すてなへなさるも、
要用ようようたるべし、きて又植またうるの、期節きせつと申ますい、ま
きつけよりして、三十二三日、乃至乃至ハ五十と、四

五日なるべし、稲苗うるの、適度
と申すは、四五寸乃至は、一尺ばかり
り小、のびたつうちにて、葉先の青
みが、少しく變ずる、頃小てよから
ん、さて又さしなへ、二本を一株
乃至十本、十本一株、一歩の地面小、
六十株ほど、植ると假定し、三百

坪小は、十有八萬粒數いります、
一升の粒數、四萬とつもれば、四升
と五合を、要する割合、薄う忍する
小は、大概一升、播種して澤山、残ら
ず芽がで、のこらずうだてば、不
足の之なし、然る小厚まき、あつ植
しなざる、地方小於ては、一及二斗

餘の種籾仕用し、一步小一升、四
五合まゝあり、百有餘かぶの種秧
するあり、これらが爲に、除草に
刈採り、手敷を費やし、且また種量
よ、ごろんをかされて、とりいれへら
すり、馬鹿げたことなり、薄まき苗
小て、うす植なされば、除草に蟹爪、

使用の便あり、生立さかり小、温
氣も風氣も、充分通して、丈夫に繁
茂し、收穫にほきり、保證をします
る、不注意農家の、苗田と申すり、
風氣のとほらぬ、窪地や濕地に、ま
りくること故、いもぢに虫害、極め
てのがれず、ひるもふたもだが、青

苔牛の毛、交つてたひたち、其苗植
れば、草取する小も、手敷をついや
し、損毛あるべし、さて又もどつて、
説明しますが、居屋敷まはりの、
小池や小川の、腐れた水中に、
ひたすひ、甚だよからず、其種たひ
たる、稲苗うれば、穂孕期節に、

葉折の病を、發することあり、ひた
した粃種、芽だしてまくのも、少く
く芽先が、見にます位ゐひ、妨げな
けれど、三四分芽を出し、播きつけ
なると、水中小さかたち、風雨に
ごろつき、芽腐りするやら、根ぐさ
りするやら、變化を来して、雄なへ

となるやら、其苗植れば、通常稲よ
り、丈のみ長ドて、莖葉がほろくて、
十四五粒なる、馬鹿穂を出します、
軟泥なる地小、芽のでぬ種籾、ま
くとしてなげると、地中にはまりて、
生立しませず、かくなるどろ地は、
灰砂あはせて、一步小大概、一升

散布し、暫くまちをば、其水すむべ
し、其みづ清んたら、早速まくべし、
而してすぐさま、一畝に四五升、
濁水散布し、注意をなすなら、埋
没なんぢや、杞ひ立ろこねの、憂ひ
いござらず、苗採るときにも、根は
なれ宜しく、さて又畑苗、仕立て植

れば、收穫多ひの、早害ふつよいの、
なんど、云ふ説、いろくあれど
も、畑の苗場、鼠にけらむ、雀
ふ土龍に、困難のみか、其うへ早
苗が、成長をしても、雨ふり年ふ、
根ばりが強くて、苗とりよからず、
插秧後に、生立はやくて、莖葉

の太る、見にますけれども、螟蟲
多きに、くるむとあり、畑苗作
る、苗代時分に、水なき地方、
設くる法にて、水ある地方、作る
も益なし、右等の件々、考ひ合せて、
種播きするなら、生立よくして、
苗とり手軽く、腰骨いたいの、肩肉

はるのと、馬鹿げた苦勞ハ、少しも
 ござらず、もうともく、間違ひご
 ざらず、御縁があつたら、後日に參
 つて、さしなへ水掛、肥料、除草に
 害蟲豫防、收穫調製、貯藏につきかた、飯炊
 法まで、くはしく述べます、其時をか
 しやれ、ほ、た、い、く、く、終

明治二十三年二月四日印刷出版
 同二十五年七月十六日印刷再版

著作無
發行者

奈良軍平

群馬縣南勢多郡富士見村

印刷人

岩間多満

京橋區瀧山町壹番地

發兌

秀明堂

同

賣捌

有隣堂

同區南傳馬町二丁目十三番地

各府縣書林



群馬県立図書館



0797690-5